

文化としての岐阜の都市空間に関する研究・その 2 -鵜飼の環境デザインを考える-

Study on urban space of Gifu as culture 2 -From the viewpoint of Landscape design for cormorant fishing-

柳田 良造
Ryozo YANAGIDA

Abstract

Cormorant fishing has an old history, and is folk customs with a deep occupation and life over the river culture in Japan . This study considers cormorant fishing's characteristic as a waterside environmental design through the comparison survey of cormorant fishing to whom Nagara River is mainly done in the river in Japanese various places.

Keyword : 岐阜, 長良川, 鵜飼, 都市デザイン, ランドスケープ, 景観, 観光

1. はじめに

鵜飼は 1300 年の歴史を有すると言われるように、日本における川文化をめぐる生業と生活の関わりの深い民俗である。本来鮎漁の主要な漁法のひとつとして行われてきたが、漁法が鵜という鳥を使い、鵜匠が巧みな技を駆使する独特のものであるため、平安期以降その見物（観光）が、貴族階級や武将などの遊興のひとつとしても知られてきた。現在、日本各地で行われている観光としての鵜飼は、江戸末期にその形式が成立したものと云われ、その有様は、例えば江戸時代中期に描かれた「鵜飼遊楽図」¹⁾ (図 1) 等に伺うことができる。

また戦前の日本各地の名所、都市景観を独特の鳥瞰図法で描いた吉田初三郎の「岐阜鳥瞰絵図」²⁾ (図 2) にも、長良川とそこで繰り広げられる鵜飼模様が、岐阜の都市空間のハイライトとして描かれているのを見ることができ

る。

鵜飼は水辺の生態、景観、民俗、遊興等、多様な要素がかかわる総合的な環境デザインの事例である。現在、観光としての鵜飼は岐阜・長良川、愛知・犬山、京都・宇治、山口・岩国、愛媛・大洲、大分・日田など、西日本各地の川で行われており、それぞれの地域の水辺と生活文化を特徴づける要素である。鵜飼については歴史文化的な既往研究³⁾は多くあるが、環境デザインとしての空間研究はほとんどなされていない。

本研究は長良川を中心に日本各地の川で行われている鵜飼の比較調査を通して、水辺環境デザインとしての鵜飼の特質を考察するものである。



図 1 鵜飼遊楽図 (右隻・江戸時代中期)

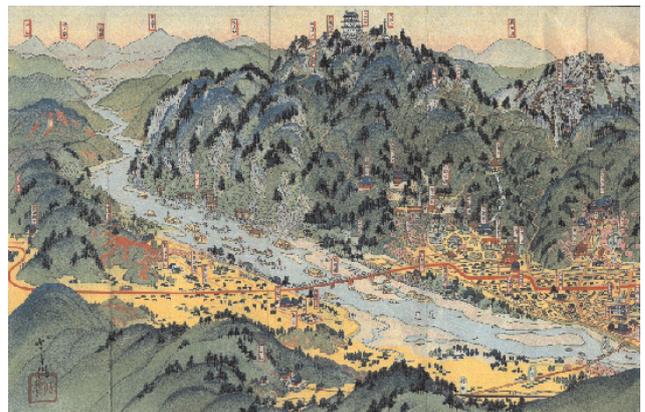


図 2 吉田初三郎の岐阜鳥瞰絵図 (昭和初期)

2. 調査の概要

調査は日本における鶺鴒の環境デザインの事例の現地調査と、それぞれの比較分析を行った。調査対象地域は岐阜・長良川、小瀬、木曾川・犬山、福岡・朝倉、大分・日田の5事例であった。

調査はまず2009年5月～6月にかけて岐阜・長良川鶺鴒での鶺鴒開きの調査(5月11日)と小瀬鶺鴒の環境デザイン調査(6月7日)を行った。

6月13日には岐阜・長良川で鶺鴒の環境デザインフィールドワーク&ワークショップを行った。参加者は30名。6月後半～7月中旬に木曾川・犬山鶺鴒の環境デザイン調査(7月4日)、朝倉、日田鶺鴒の環境デザイン調査(7月12日)を行った。

また8月後半～10月にかけて数回の岐阜・長良川鶺鴒の環境デザインの補足調査と鶺鴒研究者へのヒヤリングを行った。

3. 鶺鴒の行われている地域

現在日本における観光としての鶺鴒の行われている地域は図3に示すように、山梨県笛吹市(笛吹川)、岐阜市長良川鶺鴒(長良川)、岐阜県関市小瀬鶺鴒(長良川)、愛知県犬山市(木曾川)、京都府宇治市(宇治川)、京都府京都市(嵐山・大堰川)、和歌山県有田市(有田川)、広島県三次市(馬洗川)、島根県益田市(高津川)、山口県岩国市(錦川)、愛媛県大洲市(肱川)、大分県日田市(三隈川)、福岡県朝倉市(筑後川)の13ヶ所である。そのうち、岐阜市長良川鶺鴒(長良川)、愛媛県大洲市(肱川)、大分県日田市(三隈川)は観光鶺鴒船の隻数も多く、三大鶺鴒といわれている。

観光鶺鴒の営業形態(観光鶺鴒船の運営)は当該市の運営になっているものが多い。それゆえ鶺鴒で中心となる鶺鴒匠の存在は、市の職員的な身分が多い。特に長良川での岐阜市長良川鶺鴒と関市小瀬鶺鴒の鶺鴒匠(6人と3人)は宮内庁式部職の地位(明治23年以降)を得ている。鶺鴒匠は代々家として継承されてきているものである。

4. 調査事例からみた鶺鴒場所の環境比較

調査事例の内、福岡・朝倉は日田の下流にある温泉地であるが、今回は十分な調査データが得られなかったので4ヶ所での調査から分析する。

1) 鶺鴒が行われる場所の立地

鶺鴒が行われる場所は、市街地の中であるが景勝地の一角という場にある。岐阜では金華山、小瀬は県立自然公園、犬山は犬山城と日本ラインの景観、大洲も臥龍山荘などの景勝地が川沿いに展開する。また大洲を除いて、川沿い温泉旅館の立地する場であり、鶺鴒見物客の多くが温泉宿泊の客である。(図4)

2) 鶺鴒が行われる場所の環境

観光鶺鴒の行われている環境の基盤となるものは、まずいうまでもなく川が存在である。鶺鴒の場が設定されている地点は、川の中流部にある(非調査事例だが有田市、岩国市などは下流域にある)。調査事例では鶺鴒が行われる場所での川幅はかなり広く、大凡200～300m程である。しかしその川幅いっぱいには流れがあるのではなく、長良川のようにかなり広い川原が広がっており、水のながれは川幅の半分ほどである。一方犬山、日田では川に堰があり、



図3 現在鶺鴒が行われている地域は(○は調査地域)

1. 景勝地としての景観	長良川鵜飼一金華山 小瀬鵜飼一奥長良川県立自然公園 犬山鵜飼一犬山城 日田鵜飼一亀山公園
2. 温泉・観光地	京都一嵐山 岩国一錦帯橋
3. 橋	長良川鵜飼一長良橋 小瀬鵜飼一鮎ノ瀬橋 犬山鵜飼一犬山橋 日田鵜飼一銭湯橋

図4 観光鵜飼場所の立地環境

鵜飼の行われる水辺はダム湖的な水面となっている。そのため水深もある程度深く、実際の鵜漁は難しいと思われる。水の透明度は調査例の中では長良川が抜群に高い。(図5)

5. 観光鵜飼のプログラム

鵜飼は5月～10月に行われる。シーズンピークは夏の夜の楽しみとして行われるもので、見物客は屋形船(15人～30人の乗船定員)に乗り込んで鵜飼を観覧する。全体としては2時間ほどかけて船遊びを楽しみ、そのクライマックスに鵜飼を体験するというプログラムが用意されているのである。

屋形船は6時～7時頃に出発する。(図6,7) まだ薄暮の時間帯であるので船が動きだして、水面に近く、低い視点から、川沿い景勝地の景観が移り変わっていくのを楽し

1. 堰の有無	無一長良川・筑後川 有ー三隈川・木曾川	
2. 川の透明度・水質	長良川 > 三隈川・木曾川	
3. 魚影の濃さ	長良川 > 三隈川・木曾川	
4. 闇と人工照明	小瀬鵜飼>長良川鵜飼>犬山鵜飼>日田鵜飼	
5. 静寂と騒音	小瀬鵜飼>長良川鵜飼・日田鵜飼・犬山鵜飼	

図5 鵜飼環境の地域別比較

むことができる。岐阜市の長良川では船は15分ほどのクルーズの後、川原に停泊して、そこで1時間～1時間半ほどを過ごすことになる。その間が食事・宴会タイムになる。夜の帳が降りた頃、花火の合図とともに、川沿いの旅館街のネオン等の照明が一斉に暗くなり、やがて上流から赤松の篝火をともした鵜舟が下ってきて、ホウホウというかけ声とともに手縄で鵜を操る鵜匠のパフォーマンスが始まる。鵜匠が10羽ほどの鵜を操り、篝火のもと漁を行う鵜舟のパフォーマンスを見物する。鵜匠のパフォーマンス自体は10～15分ほどで短いものである。

6. 環境体験としての鵜飼

鵜飼をいくつかの地域で、異なる環境の中で体験してみると、環境・空間体験としての鵜飼は、単に珍しい伝統芸としての鵜飼漁を屋形船から見物することだけにあるので

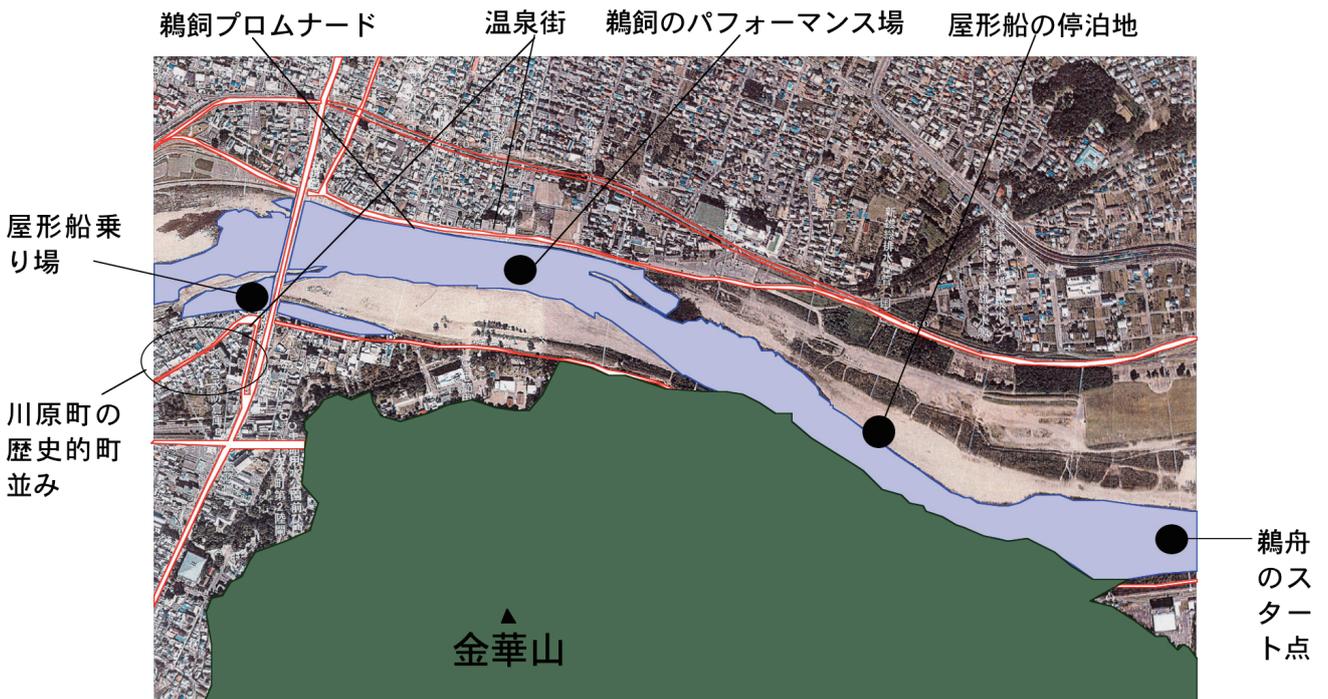


図6 岐阜・長良川鵜飼のロケーション



①船に乗り込む



⑤闇の中に篝火



②船出



⑥船の中は期待で盛り上がる



③月が出てブルーモーメントへ



⑦鶺鴒の技披露



④周辺のライトダウン



⑧余韻を残して舟着場に帰る

図7 長良川鶺鴒での鶺鴒のプログラムとシーケンス

はなく、薄暮から夜にかけての時間に、川風を体験しながらの船遊びを含めた多様な環境体験のパフォーマンスであることが実感できる。それはまず、川岸に出て、船付き場のスロープを降り、川辺のステップから飲食のしつらえが用意された鵜飼屋形船に乗り混んだ時点で、なんともいえない高揚感に包まれる。船の出港とともに、夏の夕暮れから夜への時間の体感(薄暮から夕焼け、ブルーモメント、暗)と、その環境での岸辺から町並へのパノラマ的景観の眺め、船の上での川風と川面の体感という環境体験が自然を感じる場での料理と酒の楽しみの宴を盛り上げる。空が闇に溶け込んでいく時、町並のネオンや照明がライトダウンされ、闇が深くなったとき、遠くから松の松明の篝火の灯りが遠くに見え始める。次第に篝火の灯りがはっきりしてくると共に、鵜匠の熟練のパフォーマンスが始まる。見物客は船から身を乗り出して、興味深く見物する。長良川鵜飼のショーは、6隻の鵜舟が一齐に並んで漁を行う総がらみで、クライマックスを向かえる。屋形船からカメラのフラッシュとともに、拍手がわき上がる。ショーの終わった屋形船は船付き場に戻っていく。船付き場に上陸した観光客は、余韻や名残おしさを残しながら、スロープを登り、それぞれ、帰路や街へと散っていく。

この流れを時間軸として表したものが、図8であり、空間軸側から見たものが図9である。環境体験としての鵜飼は、この時間と空間軸の重ね合わせの中に位置づけられる。

けられる。

このように環境体験としての鵜飼は、花見が桜の花だけに焦点が絞られるものでないように、鵜飼漁だけに焦点が絞られるものではなく、季節感、風、戸外、宴、仲間同士の交流等の多様で複合的な環境体験であることに、花見とある種の共通の要素をもつものであると捉えられる。

7. 鵜飼の環境デザイン

鵜飼の環境デザインとは環境体験としての鵜飼の時間と空間軸の重ね合わせの複合的な体験のなかにある。鵜飼観

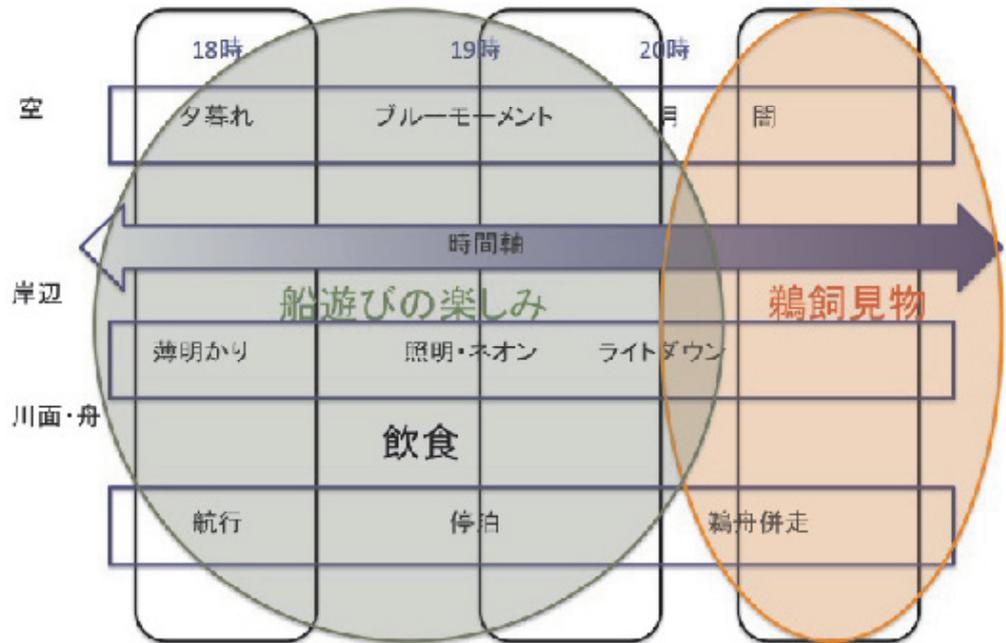


図8 環境体験としての鵜飼-時間軸

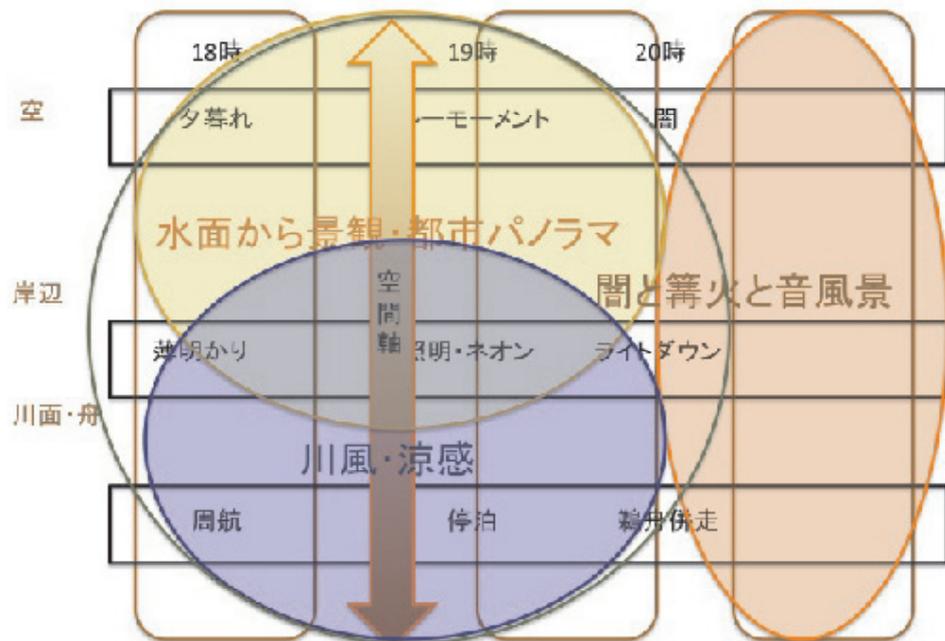


図9 環境体験としての鵜飼-空間軸

この流れを時間軸として表したものが、図8であり、空間軸側から見たものが図9である。環境体験としての鵜飼は、この時間と空間軸の重ね合わせの中に位置づけ

光船のプログラム、船での宴食、鶺鴒時の暗さと音風景の演出、鶺鴒のパフォーマンス、川の水質や鮎等の生物資源量、周辺町並と景勝地の景観、等々、多様な要素のかかわる場の環境づくりと演出デザインが必要となるものである。

調査地域での鶺鴒の環境体験をその特徴としてまとめたものが図 10 である。日田では屋形船が船を2艘つなげ、その上に20畳ほどの広さの畳のスペースをしつらえている。いわば座敷がそのまま水面に浮かんでいる状態で、仲居さんも乗り込んで料理も旅館の食事そのものが給仕される。船はダムでせき止められた水面を静かに動くだけであり、鶺鴒の芸も1隻で型を示す程度のもので、鶺鴒よりも船遊びの要素の強いものである。それと対局なのが小瀬の鶺鴒である。周りも人家の少ない自然度の高い場所で小さな船に乗り込んで、弁当を広げている客は少なく（鮎の食事は船に乗り込む前に鶺鴒の家が経営する料理店で食べる方式）、鶺鴒の技を間近で体験することにもつばらその観光体験の主点がある。犬山は犬山城や日本ライン下りの溪流など水辺からの見物場所が多く、船が水面を移動する時間と距離は最も長い。しかし、弁当を広げ飲食を楽しむようなしつらえが船に乏しく、船遊びという要素は少ない。長良川鶺鴒は弁当をひろげ、飲食を楽しむという船遊び的要素と本格的な鶺鴒の芸を体験するという両方の要素をもつ総合的なものであるといえよう。

観光としての鶺鴒は、客が屋形船に乗り込んで、鶺鴒の技を見物するという時間と場の中にあるが、その鶺鴒が成立する背景には鶺鴒家の「ケ」として民俗、鶺鴒としての訓練、鶺鴒の飼育から鶺鴒舟のデザイン継承や、とも乗りなどの操船技術、篝火の赤松の確保等々の日常も深く関わっている。

鶺鴒の環境デザインをもうすこし場所の環境デザインに引き付けて見るならば、狭義の環境デザインとしては船、護岸や船着き場、プロムナード、船乗広場、案内所等の鶺鴒乗船場所の空間装置（図 11）のあり方が問題になる。

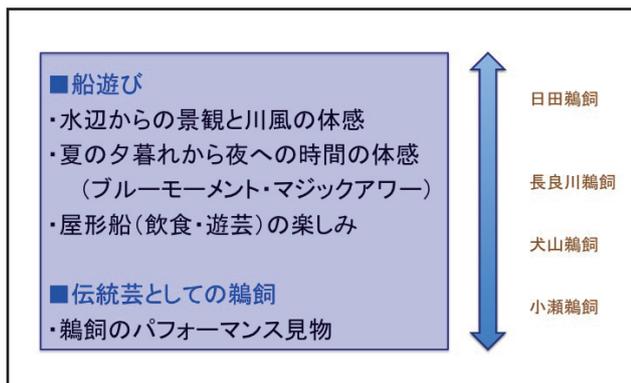


図 10 調査地域別の鶺鴒の環境体験の特徴

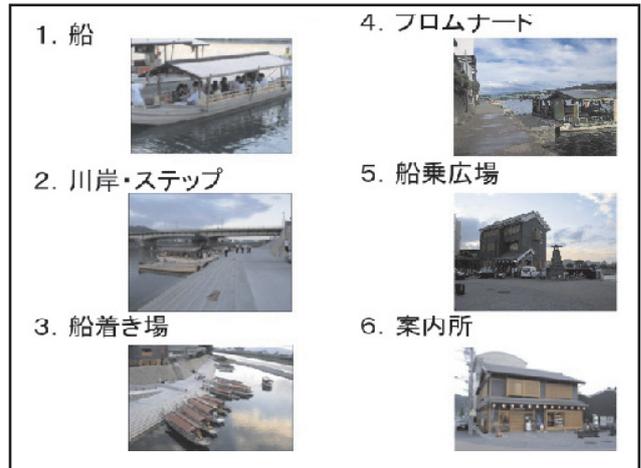


図 11 岐阜・長良川鶺鴒の空間装置

岐阜の長良川鶺鴒では、鶺鴒乗船場所の空間装置が近年整備され、特に船着き場や河岸ステップ等、質の高いデザインになっているのは評価できる。

8. 長良川鶺鴒への提言

最後に比較調査を帳して得た知見や体験から岐阜・長良川鶺鴒への提言とまとめておきたい。提言は4つある。

8-1. 屋形船の水上での周遊距離・時間の拡大

長良川鶺鴒では船は15分ほどの川クルーズの後、川原に停泊して、そこで1時間～1時間半ほどを過ごすことになる。その間が食事・宴会タイムになるが、多くの観光客は時間を持て余し、長い時間待たされてやっと鶺鴒が始まるという印象をもつことになる。鶺鴒見物では、せっかく船に乗るわけであるから、船上での楽しみは、船がクルーズして川風を感じながら、景色と空の色の移り変わりを十分な時間楽しむことができることが重要である。夕暮れから夜の闇に移り変わっていく空のもと、船の上からの川沿い景観と都市パノラマの移り変わりを飲食しながらを十分に楽しめるように屋形船の移動距離と船のクルーズ時間の拡大を図る。

岐阜長良川鶺鴒の戦後、最も観光客の多かった時期はそれほど昔ではなく、昭和53年前後と言われるが、その頃約150隻の屋形船があった。現在の屋形船の隻数は47隻で、その頃の1/3であるが、鶺鴒見物の船の混雑ぶりは相当である。現在の川のスペースだけでは、150隻の屋形船は収容できない。当時は現在のうかい大橋たもとの日野にも船付き場があり、そこから屋形船が出港し、うかい大橋周辺での鶺鴒観光を行っていた。現在の屋形船の就航距離（約1.5 km）を日野付近まで延ばすことで片道約3 km、往復1時間ほどの周航が可能となり、川でのクルーズの満足度は飛躍的高まることが期待できる。

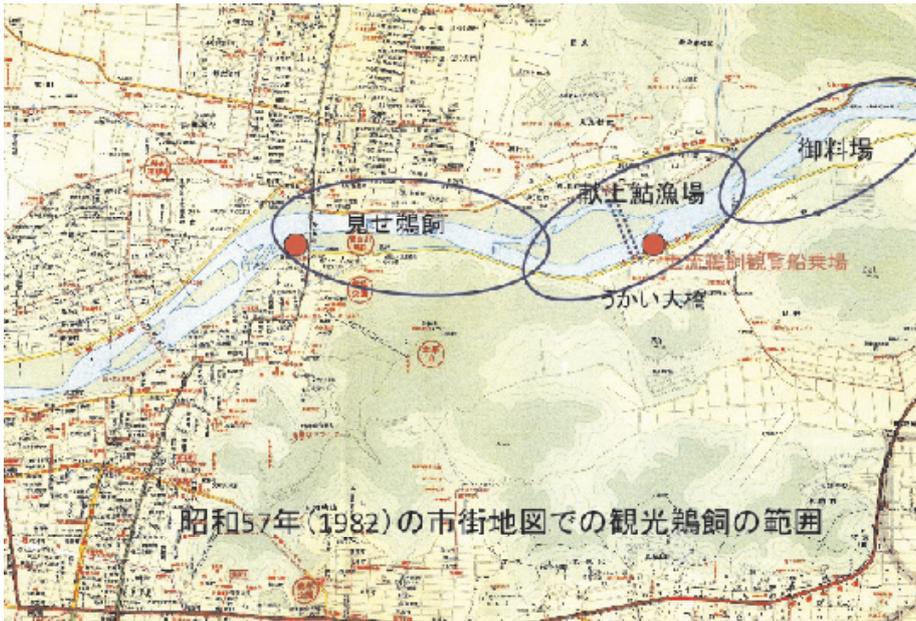


図12 昭和57年の市街地図と鶺鴒屋形船の就航範囲の拡大の計画図



図13 かつて日野鶺鴒船乗船場跡地からの金華山の眺め

8-2. 岸辺に川床的場所のしつらえ

戦前の観光絵葉書には鶺鴒見物の場所として金華山下の川に面する崖に木造の棧敷の空間（納涼台）が映っている。いかにも涼しそうな魅力的な空間であり、しかも鶺鴒を見るにも全貌が見渡せる位置にあった。京都鴨川の川床は、

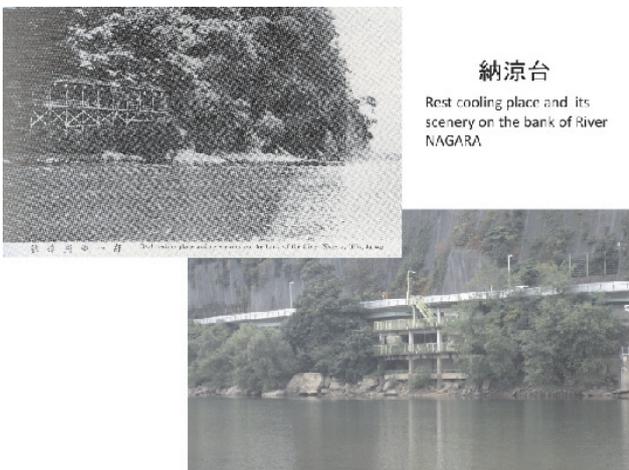


図14 戦前の絵葉書での納涼台⁴⁾と現状

暑い夏の京都で涼みながら開放的な場で飲食楽しむことができる空間装置として大変な人気の場所であるあるが、戦前に岐阜にあった納涼台はまさに川床の装置である。現在の納涼台は戦後に鉄骨造で作り替えられたものである。しかも現状は道路の上に通る全く魅力のない場所になってしまい、閉鎖状態になっている。金華山下の適当な位置に納涼台を復活させるのも一案だが、ここで言いたいのは右岸や左岸の旅館、飲食店舗等に川床のスペースをしつらえ、かつての納涼台的場を生み出し、船上だけでなく、岸にも鶺鴒見物の棧敷をもうけようという提案である。

8-3. マス観光だけでなく小人数でも楽しめるしかけと工夫

屋形船は基本的に団体客向けに用意された鶺鴒見物の装置である。個人や小人数の客でも楽しめるように、乗合船があると考えられているが、例えば、二人で乗合船に乗って、空の色の変化から川風の体感、飲食の楽しみを落ち着いて味わうことができるかといえは実際は難しい。今回の



図15 京都鴨川の川床空間

調査と体験から、小人数の場合、船に乗らずに趣向を凝らした弁当と飲み物を用意し、右岸（鶺鴒屋）のプロムナードの階段に腰をかけて、空・川・金華山の景観と闇と篝火と音の鶺鴒体験を楽しむ方が俯瞰的に全体が見え、落ち着いて十分に魅力的であるとの印象をもった。川床的スペースがあれば、岸辺からゆったりと空の色の变化から夜風を感じ、鶺鴒ショーを夜空のオープンエアで飲食の楽しみとともに存分に楽しむということがさらに充実することになると思われる。

8-4. 川岸から町並（川原町・長良・雄総・古津）

岸辺での川床的空間の整備は、川原町のように町並保存修景が進みはじめている鶺鴒場周辺の環境づくりに波及効果を及ぼしていくことが考えられる。京都の川床は魅力があるのは鴨川沿いだけではなく、周辺を含めた広い範囲に魅力的な町並があり、それらを巡り、最後の仕上げに川床を楽しむというツアーの流れがある。岐阜での鶺鴒もそういう回遊のコースづくりが重要である。そういう複合的なプログラムなしでは、鶺鴒観光の客の増大は望めない。



図 18 雄総境界の景観

鶺鴒の屋形船の乗船客数は、そもそもキャパシティ⁵⁾の問題があり、屋形船の隻数を増やさない限り飛躍的な客増大は基本的に難しい。しかし長良川鶺鴒の現状環境で、これ以上屋形船を増やすことは混雑度が増し、望ましいとは思えない。長良川鶺鴒の観光客の増大をめざすには、周辺の川原町・金華地区、岐阜公園、右岸の鶺鴒屋、雄総、古津等の町並資源を活かして鶺鴒とその周辺部への滞在客数を増加させることが重要なのである。水辺での一層の楽しみの充実と周辺の町並を含めた回遊の時間空間体験の環境整備を進めていくことが、鶺鴒観光の総体として魅力をアップさせ、来客数の増大を可能にするものになる。

9. 今後の課題

今後の課題としては今回調査できなかつた地域（岩国、大洲、京都、宇治等）でも調査を行い、鶺鴒の環境デザインの状況を把握し、鶺鴒の環境デザインの意味を掘り下げ、空間-時間の複合的な環境デザインの状況を記述する方法をさぐりたい。それらの成果と岐阜の長良川の鶺鴒との比較分析、総合的考察を深めるとともに、地域での相応しい環境デザインの在り方を具体的かつ積極的に提言していきたいと考えている。

注

- 1) 「鶺鴒遊楽図（右隻）」岐阜市歴史博物館蔵品目録『鶺鴒資料』（2006年）より
- 2) 「別冊太陽 吉田初三郎のパノラマ地図 大正・昭和の鳥瞰図絵師」（2002年 平凡社）
- 3) 可児弘明「鶺鴒—よみがえる民俗と伝承」（1999年 中央公論新社 / 新書）など
- 4) 「納涼台」岐阜市歴史博物館蔵品目録『絵はがき』（1999年）より
- 5) 屋形船の乗船客のキャパシティは15～30人（一隻あたりの乗船人数）×45隻×150日（5/11～10/15の開催日数）である。毎日満席で、悪天候等で運休日もないフル稼働を想定しても、最大15万人程度である。近年鶺鴒屋形船の乗船客数は、10万人ほどで推移している。

（平成21年11月30日提出）



図 16 川原町境界の景観



図 17 鶺鴒屋境界の景観